

↑↓

越境

いまなぜ

か

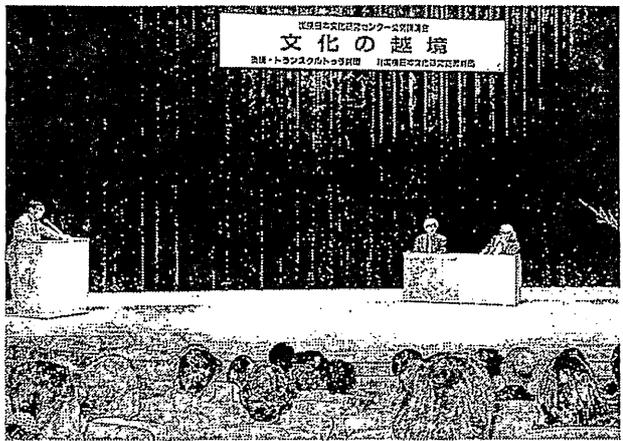
は 私たちの内面に対してはどのような影響が及んでいるのだろうか。

「越境とは、単に境界の外と内を行き来するだけでなく、心の中の境界をもへぐり抜けることだ」

「異文化間の誤解は、自らの中で起こりうる問題を投影している。日本やドイツについて米國で書かれた本を読んで、分かるのは実



稲賀繁美助教授



「文化の越境」をテーマに開かれた国際日本文化研究センターの公開講演会（11月11日）

世界のボーダレス化が進んだいま、「文化の越境」は私たちをも巻き込まずにはおかない。国立民族学博物館の特別展で見られるアボリジニやイヌイットの絵がその表出の一例だとすれ

は米國人のこころだ。同様に一人一人の中にも、文化的な壁が存在している」

先月十日から四日間、国際日本文化研究センターで「文化の越境」と題する国際研究集会が開かれた。二日目の公開講演会で、講師

を務めた山口眞由札幌大学学長とロベール書店（クラランス）のアラン・レイ辞書編集主幹から、このような指摘が相次いだ。

稲賀繁美助教授は、文

一人一人の中にも 文化的壁が存在

化の越境を「外から被るような影響ではなく、地球に住んでいるわれわれ一人一人が自ら生き、そして他の人に強いている現実」とみる。たとえば日本の食料輸入が、それを生産している外国の農業や水産業に大きな影響を及ぼす。経済援助が、援助先の社会に思わぬ波紋を投げる。逆に、日本に滞在する外国人就業者は、日本社会の流れ儀やしきたり、規範と日々衝突し「精神的な越境を体験している」。彼らと接する私たちもまた、自分の中の壁や境界線に気がかざるを得ない。

問われる異文化介入の倫理

自分の内なる世界で文化を越境する行為が、くく日常的に経験される出来事になった半面、そこで発生する事態の分析や、越境に際しての倫理規定などは学問的に十分、検討されているとはいえない。今回の集会は副題に「問文化的コミュニケーションの倫理」に向け「を掲げ、文化の越境にかかわる不平等なども討議で取り上げた。

宮地尚子近畿大学講師は、アフリカ・シブチの難民キャンプで医療援助に携わった経験を基に発表した。数多い難民からどうやって救出対象を選ぶのか、選んだ子どもを養子として育てる覚悟があるのか。この質問したと、援助の「自問した」と述べた。自意識性や、自分自身の「距離をとった関与」にも疑問を投げかけた。その発表を、稲賀助教授は「異文化への介入の倫理を問う直す根源的な問題提起だった」と振り返る。

医療介入は極限的な場面だが、現代に生きる私たちは日常的に、文化の越境に向き合わざるを得ない。そこでのどのような態度をとるべきなのか。「越境を肯定的にとらえれば、狭小な固執主義に閉じこもること